

尋常の事

時々私をおとづれる禪宗の老僧、——生花その外古い藝術の名人——がある。色々の古風な信仰に反対の説教をして縁起や夢合などを信じないやうに説き、ただ佛の教をのみ信ずるやうに勧めて居るが、それでも檀家には評判がよい。禪宗の僧でこんな懐疑的なものも少ない。しかしこの私の友人の懐疑も絶対ではない、先日遇つた時、話は死者の事に及んだが、何だか氣味の悪い事を聞かされた。

『幽霊だの、お化だのと云ふ事は愚僧は信じない』僧は云つた、『時々檀家の人に来て、幽霊を見た、不思議な夢を見た、と云つて来る、しかし詳しく尋ねて見るとそれには相應の説明のつく事が分つて来る。』

『ただ、愚僧は一生に一度中々説明のつかない妙な經驗をした事がある。その頃九州にゐて若い沙彌であつた、若い時にはだれもやらねばならぬ托鉢をやつてゐた。或晩山地を旅して居る間に禪寺のある村に着いた。きまり通りそこへ行つて宿を頼んだが、主僧は何里か離れた村へ葬式に出かけて、一人の老尼だけが留守に残つてゐた。尼は主僧の留守中、人を入れる事はできない、』

それから主僧は七日間は歸るまいと云つた。……その地方では檀家に死人があれば、僧が行つて七日の間、毎日讀經して佛事を行ふ習慣となつてゐた。……愚僧は食物はいらない、ただ眠る所さへあれば結構と云つた。その上非常に疲勞して居る事を話して頼んだので、尼はたうとう氣の毒がつて、本堂の須彌壇の近くに蒲團を敷いてくれた。横になると愚僧はすぐに眠つてしまつた。夜中に——大層寒い晩であつたが——愚僧の休んで居る近くの所で木魚をたたき音と、誰かが唱へる念佛の聲で眼がさめた。眼を開けたが、寺は眞暗で、——鼻をつままれても分らない程の暗さであつた、それで愚僧は不思議に思つた。こんな暗がりのうちで木魚をたたいたり、讀經をしたりするのは一體誰だらう。しかし響きは初めは餘程近いやうだが、何だかかすかでもあつた、それでこれは自分の思ひちがひに相違ないとも考へて見た、——主僧が歸つて來て寺のどこかでお勤めをして居るのだとも考へて見た。木魚の音と讀經の聲に頓着なく、愚僧は又寢込んで、そのまま朝まで眠りつづけた。それから起きて顔を洗つて着物を整へるとすぐに老尼をさがしに行つた。それから昨晩の御禮を云つたあとで、「昨夜あるじは御歸りになりましたね」と云つて見た。「歸りません」老尼の答は意地悪さうであつた。「昨日申しました通り、もう七日間は歸りません」「ところで昨晩誰か、念佛を唱へて木魚をたたきのを聞いたので、それで、あるじが御歸りになつた事と思ひました」と愚僧は云つた。「ああそれならあるじちやありません、それは檀家です」と老尼は叫んだ。愚僧は分らなかつたから「誰です」と尋ねた。「勿論死んだ人です。檀家の人が死ぬといつてもさう云ふ事があります。そのほとけは木魚をたたいて念佛を唱へに來

ます」……老尼はそんな事には長い間慣れて來たので、云ふまでもない事と想うて居るやうな口振で云つた』

A Matter of Custom. (Koto.)

(田部隆次譯)